

説教 『土の器に隠されているもの』 山本 護牧師
聖書 イザヤ書 45:14~15 / コリントの信徒への手紙二 4:7~11

「わたしたちは、このような宝を土の器に納めている(Ⅱコリント 4:7a)。「このような宝」とは直前の「神の栄光を悟る光(4:6)」。その「悟る光」は神からのもので、「並外れて偉大な力(4:7b)」なのだ。私たちという「土の器」には、これほどの知恵の光が、これほどの神の力が、隠されているらしい。

キリスト信仰に関係なく、人間とはそうした土の器なのか。確かに人間は土(アダマ、創世 2:7)ではあろう。だが土の器とは、人間一般を言い表しているわけではない。また、弱さや欠陥や罪があるもろい土の器に過ぎない、という謙遜とも違う。私たちが土の器であることの焦点は、「いつもイエスの死を体にとっている(Ⅱコリント 4:10a)」ことにある。すなわち、イエスの死を己が身にまわってこそ、土の器たる意味を為す。それは同時に、土の器たる私たちに「イエスの命が現れる(4:10b)」こと。

キリストと出会う以前のパウロは、自分が土の器などとは、まるで思っていなかった(7リビ 3:5~6)。しかし、土の器である己を自覚してからは、「わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになった(3:7)」。そして、キリストの「苦しみにあずかって、その死にあやかる(3:10)」ことこそ、真実の生き方であると知った。土の器とはそうした生き方のことであろう。

「わたしたちは、いつもイエスの死を体にとっている」。この「死」は、ただ一般的な死ではない。敷衍すれば「[殺されつつある]イエスを身にまわっている」と読めようか。言い換えれば、イエスを身にまわう土の器は、十字架で殺されていく歩みそのものなのだ。何よりも、永遠なる神の御子が、土の器としての道を歩まれた。粘土に御子の死が練り込まれて焼成された、私という器。キリストはそれほど近く、それほどに私と「分かちがたい存在」になっている。ゆえに私たちは、「四方から苦しめられても行き詰らず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打倒されても滅ぼされない(Ⅱコリント 4:8~9)」。人生の中で私たちは、途方に暮れることがあるだろう。だが失望しない。打倒されることもあろう。だが決して滅ぼされない。「イエスの命がこの体に現れる(4:11)」ゆえに。

「神は確かにあなたのうちにいる。ほかにはおられない。他の神々はむなしい。まことにあなたは御自分を隠される神。イスラエルの神よ、あなたは救いを与えられる」と(イザヤ 45:14b~15)。「御自分を隠される神」とはどういう意味か。旧約学者は、「隠される」の原意は強意形で、忠実に訳せば「隠し通す」だと言う。なぜ神はそれほど「御自分を隠し通される」のか。この御言葉は近代の実存哲学者らに影響を与えた。哲学者は、苦難によって神を見失う中に「神は生きている」と述べる。知覚や感覚に触れるもの、力の誇示や証明を欲する人間の小賢しさを超えて、神は「御自分を隠し通される」。

「神は確かにあなたのうちにいる(45:14b)」。どのように「いる」のか。土の器たる私たちに隠されている(Ⅱコリント 4:7)。土の器には、神に由来する(4:7)イエスの十字架と、復活の命が共に在る(4:11)。激甚な状況に打ち倒されても(4:9)、もろい器であっても私たちは滅ぼされない(4:9)。人間の希望的観測が皆無であっても、私たちの内に(イザヤ 45:14b)、創造主が御自分を隠し通しておられるから(45:15)。



【おまけのひとこと】

知覚や感覚は頼りにしない どうしたって私の範囲に過ぎないから 使徒の列に並んで この身を土の器として献ずる 私という牢獄に棲まったまま 意地の悪い自己愛には縛られない 自由な器